

氏名	姜 恩實		
学位の種類	博士（美術）		
学位記番号	第131号		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目	16世紀朝鮮前期仏画の材料・技法研究—金泥線描仏画を中心に—		
審査委員	主査	教授	竹浪 遠
		教授	宇野 茂男
		准教授	高林 弘実
			瀧 朝子（大和文華館学芸部課長）
			安井 雅恵（京都市文化財保護課係長）

論文の要旨

本研究は、16世紀、朝鮮前期に宮廷とその周辺で制作された金泥線描仏画の材料や技法について、科学分析を含む実作品調査から考察を行う。そして、そのデータを踏まえたサンプル制作による実技実験に基づいて、調査作品の復元模写を制作する。これらの調査、考察、実技制作から原本の制作当初の状況を再現し、この時代の仏画の特質や制作技法を明らかにすることを目的とする。

朝鮮時代には儒教が国を治めるための根本的な思想とされ、仏教は抑圧されたが、実際には根強く信仰され、宮中では華やかな仏画が多く描かれた。特に16世紀半ばに権力の座にあった文定王后（在位1517～1565）の時代には王室の繁栄を願って多くの仏画が発願された。本論文のテーマである金泥線描仏画も朝鮮前期の仏画の典型的な画法である。調査対象とする比叡山延暦寺所蔵「阿弥陀八大菩薩像」（1532年）、京都市立芸術大学芸術資料館所蔵「薬師三尊八大菩薩十二神将」（1561年）、徳川美術館所蔵「薬師三尊図」（1565年）、西明寺所蔵「阿弥陀三尊図」（16世紀）は、京芸本と徳川本が文定王后の発願で、比叡山本はそれに先行する時期の宮中の女官の発願であり、西明寺本も16世紀の画員（宮廷画家）の制作である。

第1章では朝鮮前期金泥線描仏画について美術史的な見地より図像や様式に関する情報を整理する。朝鮮時代の金泥線描仏画は、前朝の高麗時代よりも多くの作例が保存されている。朝鮮初期である1459年の木版画の図様には既に後の金泥線描仏画につながる図像特徴が見いだせる。仏心が深かった文定王后は多く仏画を発願し、金泥線描仏画の研究において最も重要な時期である。王室の発願で絹本に金泥を主体する華やかな様式が流行し、庶民の発願で麻に黄色や白色などで描いた淡白な様式まで現れたことなどを紹介した。

第2章では、画記が残っている金泥線描仏画の中で最も先に制作された比叡山延暦寺所蔵「阿弥陀八大菩薩図」を取りあげる。画記欄、主尊の箕形光背、菩薩の持仏には朝鮮仏画の特徴が既に表れ

ており、基礎材は、全面裏に朱が塗られている。赤外線撮影で主尊と菩薩の顔のみ黒の骨描き線が観察でき、肉身の濃い金泥部分に白色が下塗りされていた。

第3章では文定王後の発願で1561年に制作された京都芸術大学芸術資料館所蔵「薬師如来三尊八大菩薩十二神将図」の図像を解析する。多数の尊像を描く充実した描写ながら、その存在は広くは知られておらず、本格的な検討も筆者が初めてである。材料の科学分析や制作技法に着目し、雲や霞部分に金泥を裏から塗っていることなど、画家の素材への意識の高さが指摘できた。本図と同時に制作された圓通寺所蔵「薬師如来三尊八大菩薩十二神将図」と図様を比較し、描かれた線は京芸本が圓通寺本より角があり、強弱もはげしいこと、顔や、衣文線、菩薩の宝冠でも微妙な差異が認められることから、それぞれ別の画員によって制作されたと考えられる。

第4章では、京芸本と同じ文定王后によって1565年に発願された徳川美術館所蔵「薬師三尊図」について考察する。制作時期は京芸本の4年後で、400幀という膨大な数の仏画が描かれたうちの一幅である。画絹を織られた方向から90度傾けて使用する横使いの例であること、肉身の金泥を塗る前に白色顔料で下地を塗っていることに注目した。本図と同時に制作された韓国中央博物館所蔵「薬師三尊図」との図様の比較から、図様はほぼ同じであるが、細部は微妙に異なり、画記の書記者も異なることを指摘した。

第5章では、宮廷画員の李自實によって描かれた西明寺所蔵「薬師三尊図」の図様を分析し、様式検討から16世紀に制作されたことを論証する。上述の三作品よりサイズが小ぶりで、用いられた絹もそれらとは異なっている。本尊の顔のあたりには制作時の金泥のはみ出た箇所を赤色で塗りつぶすなど、やや本稿の他の調査作品とは異なる制作状況をうかがわせる。また、本図の表装は朝鮮時代当時の形式が保たれており、しかもそれは、韓国に保存されている伝統表装が朝鮮後期のみであるため、表装の歴史の上からも重要である。

第6章では、ここまで取りあげてきた比叡山延暦寺本「阿弥陀八大菩薩図」、京都芸術大学芸術資料館本「薬師如来三尊八大菩薩十二神将図」、徳川美術館本「薬師三尊図」、西明寺本「阿弥陀三尊図」の調査結果から、図様や材料等の相互比較をし、16世紀の金泥線描仏画制作の内実を検証する。薬師と阿弥陀のように尊像が異なっても共通の図像構成がとられること。肉身には白色顔料の下塗りを施す場合とそうでない場合があること。背景の赤色(朱)は裏から塗るのが通例であり、金泥による雲は裏彩色の場合と表からの場合があること。下描き線は墨線を用いる場合と金泥線のみとする場合があることなどが上げられた。作品間には互いに共通点の認められる一方で、微妙な差異も存在し、当時の宮廷における金泥線描仏画の伝統性・規範性ととも、細部には複数の描法が併存していたことが明らかとなった。

第7章では、前章までの作品調査や科学分析から得られた結果に基づき、彩色技法に関する実験を行い、その結果を考察した。裏彩色は表に染料を塗った時が最も表の染料色が鮮明になり、朱で裏彩色を行った時が最も金泥の効果が良かった。白色の下塗りの実験では、白土を塗るほうが金泥が少量でも黒い骨描き線を隠すことができたため、金泥の節約ができる方法と分かった。また、塗布面には絵具層の厚みが増すことで量感が強まり、肉身の存在が強調される。しかし、掛け軸の巻き開きを繰り返すと、白色の下塗りの厚さで金泥の剥落が生じてしまうという欠点も指摘された。その上で、保存科学分析の結果と実験による考察に基づいて、比叡山延暦寺所蔵「阿弥陀八大菩薩図」、京都芸術大学芸術資料館所蔵「薬師如来三尊八大菩薩十二神将」、徳川美術館所蔵「薬師三尊

図」の模写を行い、裏彩色による鮮明な赤地に金泥の映える制作当時の姿を蘇らせた。

以上、本研究では16世紀の朝鮮前期の金泥線描仏画4点について、詳細な原本調査を行い、顔料分析などの科学的な手法も用いて素材と技法を明らかにし、その成果を復元模写に反映させた。それによって、一件類似して見える金泥線描仏画にも、実際には基底材の絹の組織や使用する方向、図像の規範と汎用性、下描きの墨線・金泥線の選択、肉身部分の下地の白色顔料の有無、髪や眉・持物などの群青・緑青の使用、画記欄の形式等、多数の点で差異や複数の方式があることが判明した。それらは、貴人たちの信仰に込めるべく、この時期に大量に仏画制作を担った画員画家たちの活動の軌跡であり、単なる図像学や様式研究にとどまらない、より生の作画の様相を伝えるものである。

今回取り上げた作品以外の現存作例もなお多く存在し、宮廷以外で制作された例や、前後の時代との関係性などについても興味もたれる。本研究で得た成果をもとに、今後ともより研究範囲を広げ朝鮮仏画の研究に寄与していきたい。

審査結果の要旨

【論文の目的と内容】

本論文は、朝鮮半島への仏教伝来以後、歴代にわたって制作されてきた韓国の仏教美術のうち朝鮮王朝（1392～1897）の仏画をテーマとし、素材と技法から、その制作実態を解明しようとするものである。朝鮮王朝は、豊臣秀吉による文禄・慶長の役（16世紀末）を境に、前期と後期に分けられるが、このうち姜氏（以下、著者）が注目するのは、前期に属する16世紀の作例である。

儒教が統治の根幹に据えられた朝鮮王朝では、仏教は抑圧され仏画の制作も衰退したと思われがちであるが、実際には王室、民間双方において制作は続けられ、芸術面からも宗教・文化的な観点からも重要な意義をもっている。特に中宗の王妃で明宗の生母の文定王后（1501～1565）が実権を握った時期には、その信仰に基づき多数の仏画が制作された。

しかし、一時代前の高麗仏画が世界的に評価され盛んに研究されているのに比べれば、いまだ関心は低いのが実情である。また、朝鮮時代後期の仏画が韓国に多数現存し自国内で盛んに研究されているのに対し、朝鮮前期の仏画はその多くが日本に伝存し、いまだ研究が進んでいない状況にある。

本研究は、このような状況を踏まえて、京都などに現存する朝鮮前期仏画のうち特に金泥線描仏画に焦点を当て、科学分析を含む綿密な作品調査を実施して、その結果に基づいて考察と復元模写制作を行ったものである。

論文の内容は以下の各章からなっている。まず、序論では、対象となる朝鮮前期仏画についての研究状況が紹介され、本研究の目的がその図像、材料、技法などを美術史、文化財科学の手法および実験と模写制作による実技検証の各面から多角的に解明することにあるとの説明がなされる。

そして、第1章において、文定王后を中心とする朝鮮時代前期の宮中での仏教崇拝と仏画制作について概観がなされ、金泥線描仏画作例の現存状況が紹介される。その上で、第2章から第5章までは、実際に熟覧調査することのできた作例4点それぞれの調査結果と考察が行われる。

第2章の比叡山延曆寺所蔵「阿弥陀八大菩薩像」（1532年、以下、延曆寺本）は、文定王后期以前に宮中の女官の発願で制作された、現在知られている朝鮮前期金泥線描仏画の最古の作例である。赤外線撮影によって尊像の面貌に墨で骨描きが行われている一方、それ以外の部分は金泥で直接描写されたと考えられること、また、蛍光X線分析と顕微鏡写真によって、朱で画面全体に裏彩色が施されていること、如来と菩薩の肉身の金泥面には下塗りとして白色顔料が塗られていることなどが注目点として挙げられる。

第3章の京都市立芸術大学芸術資料館所蔵「薬師三尊八大菩薩十二神将図」（1561年、以下、京芸本）は、文定王后が王室の繁栄を祈願して嘉靖40年（1561）に薬師如来の図を金泥線描5幅、彩色2幅制作させたうちの1点で、著者が韓国で2018年に学会発表を行うまでは、朝鮮前期の仏

画作例としては認知されていなかったものである。比叡山本と同様に朱で画面全体に裏彩色が施されているが、面貌にも骨描きは行われず全ての線を金泥で直接描いたこと、尊像の肉身の金泥面に白色下地は塗られていないこと、雲の金泥が裏彩色であることなど比叡山本との相違点も、科学調査により明らかとなる。また、同時に作られ図像的にも共通する高野山円通寺本との比較によって、細部の差異を指摘し、描いた画家が異なることも言及している。

第4章の徳川美術館所蔵「薬師三尊図」（1565年、以下、徳川本）は、文定王后がやはり王室の繁栄を願って嘉靖44年（1565）に発願した釈迦、弥勒、薬師、阿弥陀それぞれ金泥線描50幅、着色50幅、総計400幅のうちの1点である。本図では頭髪や肉身部分の顔料の剥落箇所に金泥による骨描き線が認められること、朱で画面全体に裏彩色が施されていること、如来と菩薩の肉身の金泥面には下塗りとして白色顔料が塗られていることなどが、科学調査により判明した。同時の発願で図像も共通する韓国国立中央博物館本との比較によって、細部の図様の差異が見出され、描いた画家が異なる可能性も指摘される。

第5章は京都市内の西明寺に所蔵される「阿弥陀三尊図」についての報告で、画員（宮廷画家）の銘があり様式検討からも16世紀の作とする。上述の三作品よりも小ぶりで、画絹も異なるなどの興味深い指摘がなされるが、それ以上に重要な点として、朝鮮時代の表装が保たれており、表装の歴史の点でも貴重な作例であることが報告される。

第6章では、これら4作品の図様や技法等を比較することで、16世紀金泥線描仏画の制作の内実が検証される。薬師と阿弥陀で尊像が異なっても図様構成に共通性が見られること、肉親には白色顔料の下塗りを施す場合と施さない場合があること、裏側から赤色（朱）を塗るのが通例であること、下書き線に墨線を用いる例があることなど、作品間での微妙な異同が明らかとなる。

第7章では、これまでの調査結果や化学分析の成果を踏まえて、朱の裏彩色と絹の地色の処理の効果、白色顔料の下地が金泥の肉身表現に及ぼす効果に関する実験を行い、朱の裏彩色と表面からの赤系の染料の塗布の併用によって最も地色が鮮明で金泥の発色がよくなること、白色の下塗りは金泥が少量でも明るく発色し素材の節約にもなるが、剥落が生じやすいことなどが実証される。そして、その結果をもとに、比叡山本、京芸本、徳川本の三作の復元模写が描かれ、退色、剥落のおこる前の朝鮮前期金泥線描仏画の本来の画面が再現された。

結論では、各章の考察で得られた結果や事項を整理して述べた上で、「それらは、当時の信仰に応えるべく、この時期に大量に制作が重ねられた画員画家たちの活動の軌跡である」と総括している。

【審査の所見】

本審査発表後に出された所見を、論点ごとに整理してまとめると、以下のようになる。

(論文のテーマの意義)

研究題目である朝鮮時代前期の仏画は、その前後の時代に比して専門に扱う研究が遅れており、基礎的な調査および論考は韓国・日本でも少ない。本論文では、京都市立芸術大学が所蔵する「阿彌陀八大菩薩図」が朝鮮王朝第十一代中宗の王妃であった文定王后によって発願されたものの一幅であったことを指摘し、なおかつ、日本に伝存する同時代の仏画の中でも文定王后発願作品およびこれに類する宮廷による発願と考えられる三作品に絞って調査を行っており、比較対象に適した作品選択といえる。朝鮮前期の仏画に対する素材・描法に関する研究で、これまでの美術史研究や文化財調査研究を補う有益なテーマ設定となっている。

(調査内容について)

朝鮮前期の金泥線描仏画について4作の技法・材料に着目して調査を通して、赤色の地に金の線描、という類似した表現の作品であっても、支持体、金泥・顔料の扱いに相違点があることを明らかにした。特に、4点のうち3つの作品の画絹、地色、諸仏の肉身、薄い金色を呈する部分などについて同じ精度で調査がなされており、朝鮮前期の金泥線描仏画の材料・技法を知る上で基盤となるデータが収集されている。顕微鏡観察および元素分析から使用された材料名を推定する論述は適切である。

研究対象とした作品は発願銘が記されているものが多く、そこには「真彩画」と「純金画」、「金画」と「彩画」がセットで制作された経緯が述べられていた。絵画の素材および描法(技法)は、絵画表現と深く関わっている。素材や技法について明らかにするとともに、金泥による線描という特徴ある技法にどのような表現効果が求められたのか、制作背景に対して自らの考察を深める意識を持つことで、今後、更に研究に広がりが出ると思われる。

西明寺本の筆者について、知恩院本と比較した上で、画風が異なることを意識しながら、筆者が異なる可能性について検討しない点から、筆者の比定については保留し、作風及び画絹の特徴を丁寧に論じる方法もあったのではないかと考える。

(論述形式について)

論文の研究手法や章立てについては、妥当かつ理解しやすい構造になっているが、文章の表記や注、図版番号等に不徹底な箇所や単純な誤記が認められ、定稿をまとめるうえでの改善が望まれる。また、顕微鏡写真やデータ画像については調査結果として作品毎にまとめて別に提示するといった、わかりやすく見せる工夫も必要であろう。

(実験について)

本研究では調査から推定した技法・材料によるサンプルを作製することによって、地の色や彩色に採用された技法の意図に関する仮説を検証している。サンプル及び模写制作により、白土の下塗りが制作当初は美しい金の発色に役立つが、経年劣化に極めて弱いことを立証した点など、描き手の目指した表現や作画の様子を窺わせる興味深い結果を得ており、本研究の大きな特徴となっている。

ただ、技法・材料の調査結果からの仮説のうち、骨描きや金をうすく発色させる部分などについては検証をしておらず、部分的な実験に留まっているため、制作工程全体を俯瞰する考察には至っていない。

第7章のサンプル作成において、朱の裏彩色のみのサンプルではなく、表からの染料のみによるサンプルを作成した点は、第1～6章までの朱の裏彩色について論じた内容からすると唐突な感じがする。

(実技制作について)

論文を主に研究を進めたこともあり、提出された作品は、復元制作を行う上での考察や方針に甘さがあり、作品について論じた内容や調査結果を踏まえた上での復元模写としては根拠に欠ける点があったものの、展示された、金泥線描で描かれた作品は繊細で優美さを感じる事が出来、発表者の表現と技術の高さを感じる完成度の高いものとなっていた。当時の朝鮮王朝の金泥線描仏画の素晴らしさを再現したものと言って良い。

また、絹本の裏に朱を全面に塗るといった裏彩色は、この時代の韓国仏画の特徴とも言えるが、この表現と技法について論じ、サンプル試料を作成してその効果を考察しながら合わせて論じているところは興味深い。又その効果に伴う金泥の発色を良くする方法についても述べているなど、実技的立場からの知見を盛り込みながら行った研究は分かりやすく評価できる。よって、本研究は朝鮮前期仏画の研究に寄与し新たな内容を加えたと考える。

(総評)

本研究は、従来、前後の時代に比して注目されてこなかった朝鮮前期仏画の素材、技法に関して、4点に及ぶ作例を綿密に調査して、画像撮影、科学分析を含む貴重なデータを収集・報告した点が、基礎研究として高く評価される。これまで本学に所蔵されながらも注目されることのなかった京芸本を研究の俎上に載せたことも意義深く、そのほかの寺院や美術館の収蔵品も単に調査を実現できたことにとどまらず、制作時期や発願者にもそれぞれに差異があり、データとしてのバラエティを備えている点も評価できる。

調査の結果、4作品の表現技法は、様々に異同点があることが明らかとなり、一見すると同様に見える16世紀金泥線描仏画の制作の内実が、意外に複雑な様相を呈していたことを指し示してく

れる。それは名前も明らかでない当時の宮廷画家の制作に肉薄する生の情報であり、今後のこの時期の仏画研究に、重要な視点を提供するものとして注目される。

上述のような改善点は指摘されるものの、本稿の調査および制作の成果と学術的な意義についてはいずれの審査員も評価するところであり、全員一致で博士論文として認めてよいと判断する。